
アビリティー・ウェイク

なごみーぬ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

アビリティー・ウェイク

【NNコード】

N9873Z

【作者名】 なごみーぬ

【あらすじ】

人々の生活の中に突如としてあらわれた“能力者”という存在・・・

- 主人公バレットに関わる様々な能力者、そして組織！
- 嬉々とした高校生活・・・とはいかないみたいです
- 中二的なキャラ付けや分かりにくいパロディネタ、口調の酷さやセリフ台本書き・・・などなどありますがそれでも読める人はどうぞ

10話未満程度で完結する（予定）です

どんな意見でも構いません、感想や評価をもりそしたら遠くつれしいです

自身のFCC2ブログの方でも記事としてアップしてあります。無断転載ではありますので、ご承ください。

1話 ウィクトルナンバー（前書き）

“ありがちな”能力バトル学園モノ”という題材で書いてみました
キャラクターの区別をつけやすいため、口調などは大げさにしてい
るつもりです

小説を書き始めて日も浅いので厳しい意見やご感想など大歓迎です

1話 ウィクトルナンバー

この世界はここ数年でガラリと変わった

何故か

簡単に言つと、能力という奴が世間一般に知れわたるようになったからだ

要は、怪光線や電撃を撃ち放つたり、高速移動やテレポートできたり…

そういう人間が世界各地で増えているようだ
能力を持つ人間は問答無用で優等生…成功者として称えられる存在なのだ

正直、無能力者からしたら羨ましいなんてもんじゃない
…まあ、正直こればかりは運なので仕方がない…よな…

⋮

→ミティオライト高等学校

時は4月の中旬

生徒たちは入学式も終え新しい校舎、学級にも多少は慣れを覚えつつある頃だろう

そんな中、休み時間無意義に机に突つ伏して過ごしている
棘々した髪型の男子生徒が1人

名を”バレット・ルージット”

バレット「はあ…」

机に散乱したプリントや教科書に眠そうな視線を送りながらため息をつく
そんなバレットに嬉しそうに近づく女の子が一人
金髪の長髪をなびかせている

名を”エリス・サジテール”

エリス「こらあバレット！お昼休みなんだから外行こ！外」

ふてくされた表情でエリスを睨みつけるバレット

バレット「そんな時間は無えよ、見ろよ」のレポートの数

エリス「ただの宿題じゃん！家でやればいいんじゃないの？」

バレット「今田中」

エリス「ええ…ん、でもそもそもバレットが授業サボったり居眠りしたりするせいじゃないの？」

バレット「うるせーな…良いよなあエリスみたいな能力者様は、宿題はあらか授業すらサボつても単位やら進学には全く無問題」

エリス「私はちゃんと勉強してるよおー」

バレット「今日は午前の授業オールサボりだつたじゃねえか」

その言葉に苦笑いしたエリス、だがすぐに自慢気な表情に変わった

エリス「ふふん 今日はこの高校の”ウイクトルナンバー”の第4位を負かしてやつたんだよ」

バレット「ウイクトルナンバー？なんだよそれ」

エリス「この高校には三十人近くの能力者が居るらしいのよね！そしてその中で最も強い7人がウイクトルナンバーと呼ばれるらしいまあ私が4位に勝つたから私が3位！」

バレット「ふーん…」

エリス「という訳で私はこれから1位をぶっ飛ばしてきます！」

そのまま言ひとエリスはぐるっと一回転して教室の出口に駆けていったエリス「あ！私が高校最強ベストワンになつた暁には飯を奢つてあげる！だからこの教室で首を長くして待つてなさい」

バレット「ああ、忘れてなればなー」

力なく手を降るバレットに満面の笑みを向け足早に教室から立ち去るエリス

バレット「でいうか…お前4位だろ…まあいいけど」

⋮

放課後 体育館裏

エリス「ちゃんと果たし状は読んでくれたみたいね！」

????「はア…時代劇の見すぎじゃねえのか？」

エリス「靴箱に女の子からの手紙なんてドキッとしたんじゃないの
？第1位さん？」

????「つうか…とりまお前は死にたいってゆう解釈でいいのか
？」

エリス「ふふっ、第4位ですらあんなヌルイ高校のベストワンなん
て底が知れてると思うけど？」

????「4位？4位…あー、なんだっけなあ…アクアパラソルだか
ライオディアスだつたか…」

エリス「私もどんな能力者か忘れちゃった、弱すぎて
あなたの能力も覚えてられるか怪しいなあ

????「てかよお…お前ガチで頭悪いなあ

知ってるかあ？この高校のベスト3のメンバーは一年間ずっと
と不動なんだぜ？

第4位以下なんざ周一ペースで入れ代わってんだよ…
もう分かるよなア？4位以下と3位以上じやあ…圧倒的な実
力の大差があるんだよ…クヒヒヒ」

まるで悪魔のような笑いを浮かべる第1位に若干であるが恐怖を覚えた…

だがそれ以上にエリスは自分が一番強いといつ自信を持っていた

エリス「ずいぶん喋る口数の多い1位さんね、4位を軽く捻られて焦ってるの?」

????「あ?クヒッ　いいねえその溢れる自信喪つて良いね全然オツケー

そのプライド…ズタズタにしてやりたいわあ…じゃあそろそろ開戦つてことだえ…」

すると1位は片足を何かをしようとした

が、それと同時にエリスは片腕を前に出しそこから閃光弾のようなものを撃ちはなった

これは彼女の

大気中の空気を圧縮して利用できる能力
空気を圧縮し高質量の弾丸を放つたのだ

名を”本命空気～エアロバスター～”

が、確実に第1位へと向かっていったはずの弾丸は右に大きく反れ、近くにあつた花壇をぶち壊した

エリス「やるじゃない!」

間髪入れずにエリスは細かい弾丸を百発ほど放射状に撃ち放つ
攻撃を反らされるなど今まで戦ってきた念力や重量操作の能力者で慣れっこだ

？？？「クヒヒヒ…」

…まるで全ての弾丸が第1位を恐れるようにそれがバラバラに反れていった

鳴り響く爆発音・地面や壁、近くにあつた倉庫などはボコボコになつたが

第1位は傷ひとつ付いていない

エリス「つ…！」

？？？「さあ…て…俺は一体何をしたのかなア？
全く気づけていないアホ面にご褒美でえす」

第1位は足元の石を踏み碎いた

その瞬間、エリスに激痛が走つた

腹部に先程の石の破片が全て刺さつていた

エリスと第1位の距離は1.5メートルはある。まぐれで破片が全部こつちに飛んできた…とは考えにくい

これは…奴の能力

エリス「念動…力…？」

血が滲む腹部を押さえながら相手の能力の本質を見極めようと試みる

？？？「クヒヒヒ…つか、全然ちげえよ

てかそれじゃ超能力者ってか？そんなダセヒ代物じやあねえ
よ俺のちからは」

すると第1位は突然エリスの目の前まで迫ってきた

エリス「ひつ……」

驚くエリスの表情を見て一層笑顔を濃くした第1位はエリスの腕を掴み上げた

？？？「クヒヒヒやべぇマジで細い腕えやベーソ
つてか無謀な勝負にあつそり負けた敗者にはゞさんじ優美を
あげようかなあ？」

エリス「や……やめ……」

（1A 教室）

バレット「はあ……もうレポートは無理そつだな……」

積もりに積もつたレポートを絶望的な表情で見つめ肩を落とすバレット

ふと外野の雑談が聞こえてきた

A「おい聞いたかよ、能力者同士が体育館裏でバトってたつてよお

B「おひひ、バツクリしたぜ……しかも片方は高校最強だとよ……」

C「えひやり不動のまま相手を打ち負かしたとの事らしこですよ

今頃第1位にいたぶられてるんじゃないですかね」

バレット「…」ガタ

す」しばかり心配になつたので例の体育館裏とやらにて行つてみる事にした
おぼつかない足取りで「勉強どじょう」「腹減つたな」などとア
ップツ言いつつ歩いていると体育館裏に着いた

とりあえず人が2人居るのが見えた

エリスが血を流して倒れています。銀髪の黒服男子…

バレット「何してんだよ」

気付くと口が開きそりゃ言つていた

????「何つて…とこま…」豪美タイムつてところかなあ?..

バレット「何やつてくれてんだ…お前…」

気付くと拳を握り奴を睨み付けていた

エリスはバレットの幼なじみ、いつも無駄にこやかに振る舞つて
それが今、苦悶の表情で地に伏せている
それがなかなかどうして許せはしないようだ

????「つか、お前はどういう能力で俺を全然楽しませてくれんのかなあ?..」

バレット「無えよー能力なんて!..」

？？？「は？」

バレット「むしろ欲しいへりだー！」

？？？「はあ…ブフッ…なんだよそりゃあ…ククアホかマジで
とつ…マジにひ弱な虫一匹があ…恐ろしい恐ろしい鷹に頭
摘まれにきたって事でいいんだよなあ」

バレット「わあ、俺にはお前はヒヨコに見えるがなー。」

2話 デュアルブート

体育館裏

放課後もとうに過ぎ夜が訪れ始めていた

????「つーかよお…お前マジに頭悪いなあ…てか、自暴自棄にして
もなつちゃってんのかあ？」

脳無しの鼠に俺の名を教えてあげましちゃう、ありがたいだろ？

俺の名は”デフラグ・ブルーバック”つかお前はこの先一生この名前に怯えて過ごす事になるんだよなあ…可愛そうだわ…」

バレット「名前なんて聞いてねえ！エリスに何をした！」

デフラグ「あ？…あーいや、大丈夫だつて！ただ石ころを刺してやつただけさあ

ま…俺の事を一生忘れないように深く切つてあるがな…

クヒヒヒ

バレット「つざけんな…」の野郎！」

デフラグ「ふざけてんのはてめえだろ…無能力者が最強能力者にケンカ売るなんざギャグにしても笑えねえぞ」

バレット「つせえ！」バッ

バレットはデフラグに向かつて飛びかかった

「デフラグ、クヒヒヒ…馬鹿だな…」地面から離れて直進する“なんて、マジに”軌道に乗つて俺に向かつてる“状態じやねえか”

確かにバレットは確実にデフラグに向かつ軌道に乗つていた
しかしながら全く違う方向の壁に追突していた

バレット「ぐはっ…」

左肩をぶつけ反動で地面に叩きつけられた

バレット「お前…何しやがった…」

デフラグ「ああ？ ああ、ま、雑魚には教えても支障無えか

俺の能力は”一色配線～デュアルブート～”性質としては”軌道変化能力”って言った方が分かりやすいんだが

俺のデュアルブートは少しばかり異質な物も関わっているらしいからまあ…本質とは違うわなあ

バレット「軌道変化…？」

デフラグ「てか…体で理解すれば良いんじゃねえのか！？」ドゴォ

疑問の表情を持つバレットに間髪いれず

横にあつた体育館倉庫の窓を蹴り割るデフラグ
すると割れたガラスは全てバレットの方へ向かつた

バレット「なつ……！」

すかさず飛び退き避ける

……だが避けきれず足に一発ほど食ひ入る

バレット「くつ……要は念力ってわけかよー・ややこしい説明すんな！」

デフラグ「てか念力じゃねー一つてんだろマジで頭大丈夫かお前

俺が放つ攻撃は全てお前へ向かう軌道に向かう

だがお前の攻撃は全て俺へ向かう軌道から追い出されて
当たらねえ……はア……簡単じゃねえか……」

バレット「ぐつ……なら……！」ダッ

バレットはデフラグに向かつて走る

拳を高く振り上げながら……そう、肉弾戦に持ち込む作戦だ

デフラグ「はつはあ！無能力者は接近戦しかできねえわな！」ガキ
ン

更にもう一枚のガラスを割りバレットに向かわせる

バレット「食らうか……！」

素早く横に跳びかわす

すかさずデフラグの頬に一撃、パンチを浴びせる

デフラグ「ぶはつ！」

バレット「その攻撃は”俺の居る場所”に向かってくるだけだろ！直進しかできないなら避けちまえばなんの意味も無い！」

「デフラグ「ツざけんなアー！」

殴られた驚きと怒りでぶち切れたデフラグは懐からナイフと数本のボルトを取りだし投げ即座にバレットへの軌道に乗せた

バレット「おま…ー…うぐつ！」

奇襲とも言えるその攻撃には左手でナイフだけでも庇う事しか出来なかつた
数本のボルトも刺さり左手は完全に負傷した

デフラグ「ツ…！」

はツ…てかしかしなんだアお前、能力攻撃に耐性知識ありすぎだろ

無能力者のくせによ

バレット「じちどら能力者様には憧れ敬いつぱなしなんだよ！」

何度欲しいと思ったか…でも俺には知識を付ける事しか出来ない

だが…お前みたいな能力者には憧れねえ！後輩の女の子一人いたぶつてニヤついて何が最強だよ！…」

デフラグ「つか…なんですかあそのつまんねー理由はア

とりまあ前今自分がどうゆう状況下に居るのか理解できてんのか？」

すると上着をバツと開き

中から無数のボルトとナイフが姿を見せた

狼狽^{うるた}えるバレットの後ろで呻くような声が聞こえた
怪我で起き上がりえない体で、涙と泣き顔でくしゃくしゃな顔で彼女
は咳く

エリス「逃げて…バレット…私の為に戦わないでよう…」

エリスとバレットは幼稚園からの幼なじみだった
しかし体も弱く、自分勝手でケンカ腰で男勝りなエリスは
色々な所でいじめを受けたり、絡まれたりしていた
そんなとき、いつも助けてくれたのはバレットただ一人だった
ケンカで額から血を流していても、どこを怪我しても、”お前が無
事なら良かつた”その台詞と笑顔を何度も聞いたことか

エリスにとつてそれはコンプレックスになっていた
私がもっと強ければ、バレットは怪我をしないで済む
私がバレットに辛い思いをさせてる、不幸にしてる
そんなとき、彼女に能力が宿った
強さを手に入れた、私は最強だ。バレットに守つて貰わなくていい
んだ
彼女のコンプレックスは消えた。

はずだった

バレット「お前を見捨てて逃げる…?出来るわけないだろ!!俺が
必ず守つてやる!」

デフラグ「俺が操れるのは単純に”お前を狙う軌道”だけじゃねえ！」

”どの方向から”狙つかも精密操作できるんだよー。

クヒヒヒハハアーー全方位から狙われたら流石に避けられねえよなあーーー

バレット「舐めんなーそんな程度でーーー」

デフラグ「おいおいーーてか照準向いてんのはお前だけじゃねえんだが後ろの馬鹿女もだ！ハハハハアーーー」

バレット「なッ…てめえーーー」

やめて、そんな目で見ないで

バレットの目、怖いよ…まるで…自分を犠牲にしてでも私を…嫌だ…私の為に戦わないで…

エリス「バレットおーー逃げてよーー私なんか守らなこでよーーー」

バレット「何いってんだーー全く聞こえねーぞーーそんな言葉ーーー」

デフラグ「いいねえーーやベーよーマジドーつか大切なものーー守つてみせろよーーあ、あー？」

じつやつて守るのか見せてくれよ偽善者さんよオーー

究極の一沢だぜーー？テメーの命かーー女の命かーーじつ
ち守るんだよーーー」

バレット「じつもだーーー」

デフラグ「はアーー？」

バレット「大切な人なら死んででも守りたいさ！！でもな！」

死ぬのは間違いなんだ！死んでしまったら大切な人を泣かせてしまう！悲しませてしまう！不幸にしてしまう！！

俺は生きてこいつを守る！！」

エリス「バレット…やだ…嫌…やめてよお…」

デフラグ「…………カツ 口つけてんじゃねえええ！！！」

デフラグは無数のボルトを宙に放った
そして同時にデュアルブートを発動
バレットとエリスを囲むようにボルトとナイフが飛んでいく
そしてエリスの前に立ち塞がり一步も動かないバレットへと直進していく…

その瞬間

爆発が起きた

砂煙がデフラグに襲つてくる

デフラグ「ああ…？…つか…なんだよ…」りや…ふざけてんのかマジで…！」

砂煙が晴れ前方に目をやると炎が上がつていた
中にバレットが居る

バレット自身から出るその炎は、まるで盾のようになっていたボルトなど全て溶け落ちて消滅していた

デフラグ「は、なるほどなあ、ラッキーだなお前
今この瞬間、能力発現つてわけかよ！」

バレット「これが俺の…」

すると炎はデフラグに向かい直進する

デフラグ「でもなあ…！ラッキーはこれまでだ！炎の軌道が操れないなんて誰が言つたんだコラア…！」

すかさずデュアルブート発動

時速120km 重量96.7kg 距離にして半径10m以内であれば操作可能なのだ
炎など簡単に操れるはずなのだ

だがデフラグは気付くと空を見ていた

デフラグ「は…？」

先程の火炎に吹き飛ばされていたのだ
軌道が…変えられない

デフラグ「なッ…なんだよ…つか…意味わかんねえぞ…

発動係数は…元素の乱数調整…こいつの炎には精神的な感性が加わってんのか？

ダメだ全然理解できねえ…！…なんなんだよ…！…お前の炎

はよオ！…

バレット「うるせえ知るか…そんなの！！」ダッ

拳に炎を宿らせデフラグに向かい走り出す
デフラグはもはや一切武器を持つていなし
立ち竦^{すぐ}むしかできない

バレット「うおおおおおおお…！」

強烈なパンチが真っ正面からデフラグの顔面に当たった
何mか吹き飛び、デフラグの意識は途絶えた

⋮

数日後

1A教室

あの時俺に宿つた炎は何故デュアルブートを撃ち破ったのか
それは全く分からないが、エリスは無事だった

あのあとすぐに先生が救急車を呼んでくれたおかげで大事には至ら
なかつた

だが…エリスは能力を使えなくなつた

能力についての様々な部分は現代の科学では解明されておらず
医師によると”精神的なショック”が原因だそうだ

エリスは心を閉ざし、家族以外とは口を利かなくなつた

…勿論、俺とも

これからしばらくは入院して精神面をケアしていくそうだと
しばらくは、会えないだろう

バレット「はあ…」

落ち込みなんか気疲れなのか分からぬため息をつく彼にクラスメイトが話しかけてくる

ビオランテ「どうしたんだいバレット、その哀しい表情は」

アニー・ケイ「仕方ないね…エリスが居なくなつたもんね…至みなく
頑張つてよ」

キヨシ「ですね…まあ…バレットさんがため息つくのは昔からです
が」

バレット「…ああ」

もう少しこいつらと、エリスも一緒に馬鹿みたいに騒いで遊ぶ事はない
んだろうか…

俺はあの日…エリスを守つていたつもりだったのに
苦しめてしまつてたのか？

そう考へてるうちに、ふと涙が一粒だけ落ちた

明日からまた頑張ろう

3話 クラスマイト

雲ひとつない晴天で
5月 春特有のぽかぽか陽気で遊びに出るには持つてこいな休日だ
そんな日に、バレット・ルージットもまたクラスマイトと遊ぶ為待ち合わせしていた

バレット「いい天気だなあ」

などとこれ以上ないほど当たり障りのないセリフを吐き
ふと腕時計を見ると昼の一時丁度だった
すると向ひから女の子の声がする

「おまたせでーす」

バレット「おう」

彼女はバレットのクラスマイトであり友人である
名を”キヨシ・サンカズヤ”
黒いショートヘアで瞳の大きい美人さんだ
中学の一年生からの友達だ
いつもは休日は最低でも3人で出かけるのだが
エリスが欠けてしまった為一人きりなのだ

キヨシ「ごめんなさい、待りました?」

バレット「あ、いや、今来たとこ」

キヨシ「ビオランテくんも誘つたんですけどさしつこれないだそ
うです

せつちこも連絡来てましたよね？」

バレット「あ…いや、『めん俺携帯持つてない』

意外な返答に驚きを隠せないキヨシ

キヨシ「ええ！携帯なんて今どき彼女も友達も居ないぼっちはんで
すい顔持つてますよ！？」

バレット「なんでそんなやつが携帯持つんだよ…

連絡だったら家に固定電話あるから取れるし」

キヨシ「外出中でも細かい連絡の取り合いとか…とにかく…無いと
不便ですよ！」

今からでも契約してきましょ！携帯…！」

バレット「…めんどくさい」

キヨシ「知つてますか？”書は急げ”ですよーバレットさんが携帯
持つてないなんて嫌ですよー！」

バレットの右手を引つ張り

眉間にしわを寄せ大きな瞳でバレットを見つめながら
唇を尖らせ無理やり”携帯ショップ”なるものへ連れていった

（携帯ショップ）

……

店員「はい、では契約完了致しました
ではこちから料額のプランで……通話料金の……」

あつという間に契約は終わり

そして他様々なお得的な要素満載なサービスプランへの勧誘が始ま
つた

何故だかキヨシはしたり顔で嬉しそうだ

キヨシ「何気に私と同じ機種ですねバレットさん」

バレット「何気に……って、お前が無理やり……

まいいか、腹減ったし飯でも食べに行くかあ」ガタツ

とつあえず朝から何も食べていいないので

店員の勧誘を軽くあしらつてさつと立ち上がる

しかし携帯みたいな小さい機械は全然触った事がないので早く慣れ
る為に携帯をいじりつつ店を出た

バレット「えと……電話……つてもまだ登録してないか」

キヨシ「じゃ私がアドレスと番号送るので携帯を無線待機モードに

「……」

バレット「いや分からんしなにそれ……」

バレットがキヨシに質問しようとした所で
急に背後から男にぶつかられた
はすみで宙に舞つた携帯をなんとかキャッチしホツと一息ついた所
で辺りを見渡す

「邪魔だつてんだよ！ボウズ！！」

さつきぶつかつた男は覆面とサングラス
両手でカバンを抱えて息を荒くして向こうに走つていった

その直後、後ろから少女の声で

「返してえ！！」

声がした方を振り替えると
恐らくあのカバンの持ち主であろう少女が涙目で腰を崩して座り込
んでいた

キヨシ「ひつたくりですよ！」

「バレット」「待て！！」

間髪入れず走つてひつたくりを追いかけた
後ろからタックルをかましひつたくりはバランスを崩し電柱に激突
する
カバンは地面に落ちた

ひつたくり「ぐっ…てめえ…ただで済むと…うぐっ…」

鼻を強く打つたひつたくりはしづかめて苦しんでいる

キヨシ「良かつたあ…バレットさん怪我はしませんか？」

バレット「わい、全くあぶねーな…危づく携帯壊れるとこだつたぞ

女の子「あ…あのーありがとう」やれこめす…

な、なんてお礼を、お礼をしたらいいか！
ああの私メイカつて言います！」

長めの茶髪をなびかせる少しあどけない口調の彼女
名を”メイカ・ワットスク”

バレット「いや、大丈夫だつて

ほら、これお前のだろ？」

カバンを拾いメイカに渡すバレット

メイカ「あ、ありがとうございます！本当に助かりました！

その…あのー三万でいいですかー？」

バレット「はー？」

そう言つと財布から三万円を取りだしバレットに渡そうとしてきた
お礼を期待したわけではないし、周りからは淀んだ視線が飛んでき
て戸惑つ

バレット「いや、いろいろからーお金は大切にしろつてー！」

そんなやつたりをしてこの間に一人の背後から声がした

キヨシ「ややつ…？」

先ほどのひつたくりがキヨシを捕まえ
ナイフを首もとにあてがつていた

ひつたくり「オラお前ら動くんじゃねーってんだよ！」

女あ！コイツの命がおしけりやそのカバンを寄越しな

つてんだ！」

バレット「お前つ…そんなに女の子のカバンに興味があんのか！」

メイカ「う、え、無理です！渡せませんから！」ダッ

メイカはカバンを持つてあっさり逃げた

その瞬間、彼女のカバンからカードのような物が地面に落ちた

ひつたくり「なつ…このやつ…」

慌てるひつたくりの肩を誰かがポンと叩く

金髪ショートヘアでのっぺりした顔つきの青年だ

？？？「おーおータクリ…アレが奴らに渡りやうとはいえ…

こんな真つ直ぐ街道ド真ん中で騒ぎ起じしきやケツから食わ
れちまうぜ…」

タクリ「TKさん…でも…」

どうやらひつたくりの名前はタクリ

謎の男はTKことひつたくり

TKC「まつ、女のケツ追いかけるなんぞ。」コイツ「に任せりゃいいじゃねえか

行け！ジャント……」

するとTKCの体から紫色の蒸氣が出て
やがておぞましい顔をした巨人へと姿を変えた

周りに居た一般人たちはその姿を見るや一目散に逃げていく

バレット「なつ…お前らはもういこつてんだよ、オラ彼女返してやつ

タクリ「ちつ…お前らはもういこつてんだよ、オラ彼女返してやつ
からせつせと帰れ」

キヨシ「わつ…」

すると先ほどのひつたくりのタクリはキヨシをあつさり返した
手荒く放った為、バレットの胸に飛び込む形になつた

バレット「おつと、大丈夫かキヨシ？」

キヨシ「あ…はい…それより…なんですかあの巨人…？」

バレット「知らねえ…でもあの女の子を狙つてるつてなら放つてお
けねえな」

TKC「命令はある女の追跡と取り抑え、さあ行けジャン…ん…？」
ジャン「シユプシャパシェロスシャシヤ」

ふとTKCが紫の巨人”ジャント”の方を見ると

頭部が焼けて苦しいんでいる

バレット「おい!もういいだろーあの女子になんか恨みでもあるのかー!」

TKC「おうおうなんだ誰かと思えばバレットくんじゃないか、コマイシにケツを掘りられたくなきやせつたと去るんだな」

バレット「なんで俺の名前を……?」

TKC「ありや、随分寂しい事言つたあお前は

バレット「……でもコマイシの顔……どーかで見たよつた……どーでだつけ……」

タクリ「わっ……TKCさん、コマイシは俺が引き受けますんで、あの女頼みます」

TKC「おう、頼んだぜ!」

この場をタクリに任せ、TKCは巨人と共にメイカを追いかけた
バレットが止めようとするがタクリの手から放たれた何かに邪魔をされた

バレット「氷……!?」

タクリ「俺の能力は”氷狩”アイスショーテラー”

空気中の水分を瞬間凍結させ利用できるってんだよ

お前の炎と対になるような力つて訳だな……」

バレット「キヨシ一離れてるー!」

キヨシ「は、はい！」

キヨシを戦いに巻き込まないようにはかせたところでタクリが繰り出してきた

空気中の水分を凍らせ手に余るほどの大ささの氷の塊を三個ほど作りそれをバレットへ向けて飛ばす

バレット「くーーー！」

すかさず避け火球を撃ち放つ

しかしタクリは予め左手に氷で作った盾で身を守った

いくら氷が炎で溶ける。とは言つても一瞬激突した程度では消滅する事はない

バレット「お前らはその能力を女の子一人追いかけ回すのに使うのかよ！」

タクリ「お前、わかつてんのか、俺は”ウイクトルナンバー”元4位の

タクリ・クビクワレだぞ！」

バレット「知るか！そんな名前！！たかだか4位程度で自慢していくんなー！」

そう言うとバレットは先ほどより大きい火球を撃ち放つたしかしまたしても氷の盾で防御された更にタクリは右手に氷で作った大剣を握った

タクリ「こつちにも事情があんだよ、大人しく退いてはくれねーか
命を捨てたくはないだろ?」

バレット「お前、気付いてないようだから教えてやるよ

タクリ「…」

バレット「お前の力ってのは空氣中の水分を使って武器や攻撃に利
用するんだろ

…ならこの短時間でその盾やら大剣なんか作つたら”空
氣中の湿氣”って奴も沢山奪つてんじやないのか」

タクリ「な…！」

その瞬間、バレットの周りを巨大な炎が包んだ
湿気が無くなり空気が乾燥し、火力が著しく上昇したのだ
あまりの熱気にタクリの盾や剣は水に変わり消滅した

バレット「はあああ…！」

まるでドラゴンのような巨大な炎が拳から撃ち出され
タクリは吹き飛ばされ壁に激突し氣を失った

バレット「ふう…よし、あのTKCとか言う奴を追いかけないと…」

キヨシ「あ…待ってくださいバレットさん!」

これ、彼女がさつき落とした物なんですけど…」

キヨシが見せてきたのはカードのような物で

メイカの顔写真が貼つてあり、学生証のようにも見えたが丸つきり

違う物だった

それには "good ear" ゴッドイヤー" という彼女が所属している事務所、機関の名前が書いてあり
様々なコードアドレスや数字が羅列されている中
"人権 level 0 , 25" と書かれていた

その文字にただならぬ気配を感じ、バレットの口角は下がり冷や汗をかいていた

キヨシ「なんか…危なさそうですよ…

あの女の子とは関わらない方がいいんじゃ…」

バレット「いや…彼女が何者であつても、現に今巨人に襲われかけ
てる

俺は助ける、メイカを」

キヨシ「あはは、バレットさんならそう言つと思つてました。私も
付いていいですか？」

バレット「ヤバイと思つたらすぐ逃げろよ」

そう言うと2人はメイカが走つて行つた方向へ同じく走つた
ビル街脇の、一通りの少ない細道に2人の影は消えた

4話 パンデイバー

バレットとキヨシは、ひょんなことから出合った少女メイカを救うため

TKCと恐ろしい巨人ジャントを止めるため

ただただ走っていた

しかししばらく走っていると前方に壁三面の行き止まりが見え
同時にTKCとジャント、恐らく気絶してるのでメイカが倒れ
ていた

TKC「ちい、手遅れって奴か…」じりゃケツをやられたな
こんな目立たない場所を待ち合わせに使うとはなあ
奴らにバレたか？俺達の存在が

バレット「おい！何してんだ！！メイカに何した！」

TKC「おー…どうしたバレットこんなところまで…
この女に金でも貸してたのか？」

TKCはジャントを引っ込ませた
どうやら敵意はないようだ…

バレット「なんで俺の名をじつてんだ…」

TKC「何故つて…お前と俺は同じクラスだろ？」

相手の素性すら何も知らず

どんな答えが返ってくるのかと体を強張らせていたバレットであったが

意外な答えが返ってきたものだから、一瞬まぬけな顔をしてしまった

TKC「まあ俺は入学式以来はクラスにあまり顔見せてなかつたから仕方ないか

それより聞いたぜ?バレットよつ、お前高校の第1位を一捻りしたらしいじゃないか」

バレット「なんでそれを…」

TKC「だがどうしてお前は1位の座を欲しがらない?
ウイクトルナンバーのリストを見てもランクは一切変わつてなかつたぞ?」

バレット「興味ないんだよそんなのは…あんまり目立ちたくないしな

俺の話はいいからお前らの事を教えるよ
一体何をしてるんだ」

TKC「世界を守る為…なんて言つたら笑うか?」

バレット「なんだと?」

TKC「見る、彼女、カバンを持つていなだらう
彼女はとある組織の下請けとして働かされていたんだらう
カバンにはきっと運搬する極秘資材でも入つてたんだらう

「ぜ」

バレット「じゃあ…なんだつてメイカは氣絶してるんだよ

TKC 「運搬の最終作業は幹部の役目だ

下請けは皆幹部以上の顔を知らないし知る事は許されない
スタンガンやらなんやらでケツをやられて氣絶させられた
んだろ?」

キヨシ「…なんで彼女はそんな事をさせられてるんですか?」

TKC 「簡単に言つと…」

キヨシからの質問に親切に簡潔に説明しようとしたTKCだったが
自分を覗いたメイカ、バレット、キヨシ以外の人間の気配が向こう
からしたのだ

とは言つてもこゝは壁三面を囲われた薄暗い道
人が入つてくるのは後ろの道しかないのだが

? ? ? 「彼女が何故下請けなどに属してゐるのか、それは、救われた
子羊であるから」

キヨシ「子羊…?」

バレット「誰だお前」

? ? ? 「私は誰か、ならば言おう私はこの世界の恵まれぬ人間を救
える神だ

何故か、それは私の能力が神の右腕と言えるからだ

TKC 「はつ…よく言つぜ…しつかし悪徳組織の総括が顔見せとは
…一体なんの風の吹き回しかな?」

バレット「な、なんだよ知り合いか?」

TKC「いやあ、こいつはなかなかの有名人でな

名前は”ロッシ・ヒーコローズ”

表は”国境無き医師団”だの言われてる団体のトップなわけなんだが

裏は様々な悪徳金融や秘密機関のハーススポンサーって所だな」

ロッシ「だが私の功績はその細かな悪事をはね除ける程素晴らしい、それは何故か

君らは知つてゐるかね、目にしたことがあるか?何を

恵まれぬ不運に苛まれた哀れな人間さじなをオ

目が見えず、耳が聞こえない、顔が爛ただれ、腕脚が無い、身体が動かない

様々な不運を引いてしまつた彼らに、私は救いを『えられ
るう、一体何で

無論、この能力”等価的治癒”ヒーロンジュリでな』

バレット「な、なんだ?よく分からぬけど良い事してゐるじゃないか」

TKC「ああ、奴の能力は治癒系能力の中では最も効果の高い部類だろつ…

発動条件さえマトモなら俺もこいつには関わらないんだけどな

キヨシ「発動条件…って、なんですか?」

TKC「誰かの不自由を無くすのに、他の人間の自由が必要…って

とにかく

ロッシ「その点については、私が説明しよう—何故か
もうここまで知られているのでは生かして帰す事は無いの
でなあ

私の能力はクセがあつてな

回復力を得るには誰か別の人間の犠牲が必要なんだ

誰かの視力を奪つて初めて、別の誰かの視力を治せる訳だあ
私の組織”ゴッドイヤー”に下請けとして居る人間は皆、
私が不自由から救つてやつた者なのだ

そこに居るメイカもかつては目が見えないいたいけな子羊
だつたのだ

彼らは如何に過酷で危険な仕事を任せようとも嫌がりはない、何故か

それ以上に、幸福となれた喜びが大きく！そして再び不由な身となる現実に戻されるのが怖い！！

私は思う！何を、希望と絶望の絶妙なバランスこそが！！
人間に与えられる最大の幸福なのだと—!!

キヨシ「…メイカさんの、目が見えない…？」

TKC「人を弄んで何が幸福だ、このケツ野郎が…ジャントー出番
だ！」

するとTKCは紫の巨人ジャントを呼び出した

TKC「あのケツ野郎を死なない程度にぶつ飛ばしてやれ！」

ジャントは命令のままロッシに向かつて巨体をズンズンと前に向かわせ

拳を振るつた

だがその瞬間、ジャントは真後ろに吹き飛んだ

TKC 「！？」

ロッシ「やれやれ…組織も物騒な物を作り出した物だな…何を
空気中の水分を凝縮し瞬間膨張による衝撃波を撃ち出す武
具を…」

彼等が戦いを繰り広げる中、気絶していたメイカは目を覚ました

メイカ「うーん…」「…」

キヨシ「あっ！メイカさん、大丈夫ですか？」

メイカ「あ、はい、私は大丈夫…」

周りの状況を認識するより先に
ロッシの声が耳に響いた

ロッシ「運搬が完了した今、そこのメイカという女も最早不要…！
何故か

道中で君らのよつな肩と戯れられてるよつでは困るのだよ

…ゆえに

今後の仕事はまかせられん…」

メイカ「そ、そんな…私また暗闇に…」

キヨシ「そんなこと無いですよ！」

見てくださいよ、バレットさんは、メイカさんを助けるためにここまで来たんです

能力者に襲われても、怖い巨人に会つても
それでもメイカさんを助けに来る人が居るんですよ？ 暗闇
なんて、あるわけないじゃないですか！」

メイカ「バ、バレット…さんが…」

二人はうち解け合い、メイカの顔にも笑顔が見えた

一方、バレットの炎、ジャントの格闘攻撃

ロッシはそのどちらも先程の”武具”で無効化していた
どころか、段々と距離を詰められて行き

背後は壁となっていく…

ロッシ「たかが水分の爆発と侮つてはいけないぞ？ 何故か
それはコイツには充分な殺傷能力があるからだ。 それ故に
誰から死にたいか選びたまえ…」

TKC「…ちい…ジャントも体力が限界だ…」

バレット「くつそ…ふざけんな！」

やけになりバレットは大きな火炎を撃ち出す

ロッシ「ハハハハ！ 無駄だとわかつて…ん！？」

再び”武具”を使用しようとしたロッシであったが
何故だか作動しなかった

ロッシ「なに？…？」

そして炎を食らうのけ反るロッシ
体勢を立て直すより先にTKCが凄い速さで迫り
そのまま胸板辺りに強烈な蹴りをお見舞いした

ロッシ「ぐあああああ！」

真後ろに吹き飛び気絶した

その背後で声がした

タクリ「うわっ、危ないってんだよ」

バレット「お前は……」

TKC「おうタクリ、つまきは助かってぜ。小細工をじつも
「

バレット「え？何が？」

TKC「要はロッシのケツ、つまり背後から空氣中の水分つてやつ
を奪つたわけだな

あんな小道具よりはタクリの方が水分を使つからな

バレット「無駄遣いのプロか」

タクリ「黙つてろ」

TKC「まあいこむホラ、それより彼女の保護だ
それとバレット、お前にほんとう付き合つて貰いたいん
だがいいか？」

バレット「あ、ああいいぜ」

その後彼らは人気の無い裏道を脱出した

ロッシという男はTKCがある上層の警察に差し渡すそつだ
やがてあの組織も総括を失い風化して解体されるだろうとのこと

マイカはと詰つともう安全であるから家に帰そうとしたんだが「み、
みなさんの役にたちたいんです!手伝わせてください!」と言い付
いてきて

キヨシは「私も付いていきますね」となんの躊躇ためらいもなく普通に付
いてきた

結局全員でTKC達の居るとあるグループに入ることになったのだ

バレット「つて!なんで勝手にお前らの仲間にされたんだよ!」

TKC「いいじゃないか、俺たちはあらゆる事件を解決する能力者
軍団つてわけさ

「うーん、まあ今は他のメンバーは席をはずしてるがな」

タクリ「まあコイツが仲間になればそこそこ戦力が充実しますしね

TKC「ああ、俺は氷の能力者つて言つから冷静な奴かと思つてH
ースに任命したんだが

まさか手柄を急いで公衆の面前で引つたりするようなケ
ツだとは思わなかつたぜ」

タクリ「うつ……」

TKC「よつて、バレットーお前が今日から俺たちチームのエースだ！」

キヨシ「すごいじゃないですか！」

マイカ「え、エースと言えば凄く偉いですよー。」

バレット「あ…はい」

TKC「さあメンバーも増えたし明日から大忙しだな！」

新たに加わったメンバーも含め5人には結束が見られた
さつさと帰りたそうな表情バレットと不満丸出しの表情のタクリを
除けば彼らは正真正銘のチームだ！

⋮

次の日 ～サブロミナ第一刑務所～

ロッシ「ぐうう…私が何故こんな目に…くつ…くくく…

ならば”組織”のことも洗いざらいで吐いて奴等も道連れだ

⋮

? ? ? 「なあにそれえ」

気づくとロッシの背後には少女が立っていた

ロッシ「なつ…誰だ貴様！一体どこから…」

？？？「武具をわざわざ貸し出してやつたのにおじやんにするしき
素人能力者にボコられてムシヨぶちこまれるなんてえ
挙げ句私たちのことをチクろうとするとはねえ」

ロッシ「貴様、組織の人間か…！わ、悪かつたつて、許せ

そ、そうだ、私から奴らスペイ共の情報を提供するから…」

組織の冷酷さを知っているロッシは
彼女が組織の人間だと分かると
助けを求め始めた

その声は看守たちにも響いた

看守A「なんだあ？なんか騒がしいぞ」

看守B「おいおじつしたあ…えーと、ロッシ…ヒークロー…」

「ぎりぎりやあああああああああああああ！」

その瞬間、巨大な爆発音と発光が起きた ロッシの叫び声も

看守A「ツ…なんだおい！」

看守B「おいお前何を…
…つツ…これは…」

次の瞬間、看守2人が見たものは

“多分”人間だつたもの”であろう肉片だけであつた
少女の姿も、そこにはなかつた

5話 ワーストアウト（前書き）

うーん・・・伏線などをちりばめるタイミングがよくわかりません。
行き当たりばつたりな小説にならつたる・・・
ところが三回の話です、第一位デフラグ主役回・・・とも
言える様な

5話 ワーストアウト

（ミテイオライト高校 校庭）

夕方4時を回り

ほとんどの生徒は帰宅か部活動である
しかしながら騒がしい数名が…

キヨシ「バレットさん急ぎましょー！みんな待ってますってー。」

バレット「別に…あいつら（アケ）のどこの行きたいなら一人で
行けば…」

ビオランテ「あん？ビコ（アキ）の付いていい？付いていい？」

バレット「良いんじゃないの…」

なんの躊躇もなくTKC達の居るグループに友人のビオランテとア
ニーケイを連れて行こうとしたバレットであったが
先を走っていたキヨシがぐるっとターンしてバレットに近づき

キヨシ「駄目ですよーこれからばバレットさんと私のヒミツの時間
なんですからーーー！」

バレット「うおっ…おいつー！」

いつも董（アンドウ）バレットの手を引き離さないと走つて行った

ビオランテ「あの2人…いつの間にあんな親密に…」

アニー・ケイ「仕方ないね…あんならしねえ奴らは放つとして炒飯でも食い行くぞ。奢るよ」

ビオランテ「フウツー太っ腹ア」

そんな放課後を過ごしている中

邪氣な表情を振り撒く銀髪の男が居た
彼はミティオライト高校の”ウイクトルナンバー”第一位の デフラグ・ブルーバックである

デフラグ「つか…楽しく帰宅してたってのに学校側から呼び出しがマジで嫌なんなるわ」

どうやら彼は帰宅途中に学校から連絡をもらい
ミティオライト高校に戻っているらしい

デフラグ「ま…大した用じゃねえだろうけどな」

軽く溜め息を吐き

だらだらと歩いていると

前方から声がした

聞いたこともない女の子の声と

聞き覚えのある男の声…

その瞬間、ズン…と胸の奥が^{（はず）}疼き

指先が震えだした

”奴”だ

「ほらバレットさん！早く早く！」

「急ぐなって…転んでも知らねーぞ」

第一位のこの俺を完全素人能力者の分際で叩き潰してくれたアソツだ
こつちに走つて来やがる…
はつ…つか…あの金髪の女を守るだのなんだの言つてた癖に
別の女とつるんでやがる…てか…てめえもそういう人種かよ…マジで
よーし良いぜ…かかるこいよ…次は廃人コースに叩き送つてやる
ぜ…

「あつ、モンブランショコラムースパフェが期間限定割引つて！買
いましょうバレットさん！」

「急いでんのか急いでないのかどっちだよ！」

しかしデフラグの予想とは裏腹に
彼らにあつさりとスルーされた

デフラグ「あ…??」

なんだ？俺を覚えてないってのか？

ツ…てか、たつた一回ぶん殴られただけで何をマジになつてんだ…

俺は

とりま、ああいう人種つてのは基本的にああいつ馬鹿が多いからな

無視だ無視、無言の圧力だ
デフラグ「ん？」

RRRRRRR!!

気が付くと電話が鳴っていた
番号を見ると「非通知」となっている
しかし彼は非通知からかかつてくるのは慣れていた
第一位の座を欲しいとする能力者達が彼との決闘を望みあちらうこち
らから連絡を寄越すのだ

まあ、下駄箱に手紙置いていつたりとアナログな奴も希には居るが
…まあ、それはまた前のお話

バレットという男に負けて以来はその数もめっきり減ったので
本人としてはそこは助かっているらしいが

デフラグ「また雑魚の挑戦状かよ…」

ピッ

? ? ? 「よオ」

デフラグ「おお、どこでやるんだよ？決闘は」

? ? ? 「おオ、流石第一位様だア話が早くて助かるわア」

デフラグ「でかこっちも用事があつてなあ、アホみたいに時間は割
けねえぞ」

? ? ? 「あア、運動場の横の建設予定地で頼むわア」

デフラグ「（建設予定地って言つと本校舎とは別に能力者に関する実験調査や参考資料とかを管理する施設を作るとかつていう…

つか…とりま俺には関係ねえか」」

デフラグ「いいぜ、首洗つて待つてろウスラ馬鹿が」

そつ言うとデフラグは電話を切り

足早に建設予定地へと向かつた

（建設予定地）

? ? ? 「よオ第一位イ、大分早かつたなア おい
待ち合わせには遅刻しねエ 紳士の鏡だなア 助かるわア」

デフラグ「こんな散らかり尽くした所で決闘挑むとは… マジでうく
な能力者じゃなさそうだなあ？」

周りを見るとクレーン車やタンクローリー
瓦礫や岩石、工事用具のマトックなどが大量にあり
いかにもな工事現場であった

? ? ? 「おつといけねエ、自己紹介が遅れたな

俺の名は”パズラズ・バニッシュ”

学年はお前と同じ一年だぜ？」

デフラグ「はあ… てかどうせ明日には覚えてねえからつまんねー自

「己紹介すんなよな……」

パズラズ「悲しい事言つなア　おい、まア　こつちは準備万端だからア
……」

デフラグ「とりま蝶つてねえでかかつてこいよ馬鹿が」

パズラズ「その言葉ア……後悔してくれんなよオ！？」

そう言つとパズラズは田の前にある軽自動車に右手をかざした
すると爆発が起き、自動車は一直線に走りだし、デフラグに向かつた
デフラグ「なるほどなあ、その手…爆発で車を走らせるつて寸法かあ
でも遅え、果てしなく遅いんだよ」

あの自動車は確実に軌道に乗つている
デフラグの能力”デュアルブート”で安易に軌道を反らせられるはずだ

デフラグ「じッ…はッ…！」

だがデフラグは攻撃を食らつていた…
その反動で吹き飛んだ

デフラグ「いつ…てえな…オイ…」

パズラズ「休んでる暇ア 無エゾオ！…」

更に近くの自動車も爆発で発進させた

デフラグ「ちつ…油断してたか…そんなトロイ攻撃反らすなんざ余

裕なん」

だが次の瞬間

デフラグはまたしても吹き飛ばされ
後ろのクレーン車に撃ち付けられた

デフラグ「ぐあ…！」？

何かがおかしい、デフラグは思った
確實に奴が進ませた自動車の軌道は読めていたし
確實に軌道は変えられたはず
しかし何故だか奴の攻撃は当たつてしまつ
というのも”自動車よりも早く何かが自分に当たつている”という
感触なのだ

だが奴の能力は右手から発する衝撃爆弾のよつなもののはず
他の能力者が裏でサポートしている可能性もあるが、気配が一切感
じられないのでは違つだらう

デフラグ「ちッ…めんどくせえ…」

パズラズ「おいおい…それでも1位かア？てめエはよオ
しかしよくそんな雑魚と言つてもいい”軌道操作”な
んて力で1位の座を取れたなア」

デフラグ「喋つてる場合かよクソ野郎…

のたれ死ねクソがあああ！！」

するとデフラグは懐から数本のボルトをばらまき

全てをパズラズへと向かわせた

パズラズ「へへへ…なんだよそりやア…」

が、ボルトは全てパズラズに当たる事は無く
ガキンという音と共に弾かれ、落ちた

デフラグ「バリア…！？」

パズラズ「心の汚い愚か者には、魔法使いの胴着は見えませんでし
たってなア

そもそも俺の本質に気が付いてもいい頃だよなア」

デフラグ「見えない…だと…？？

おいおいまさか、もしかしててめえの能力は…！…！」

すると「デフラグは近くに積んであつたコンクリートの粉袋をナイフ
の軌道操作で開け

宙を舞つた粉をまた軌道操作でこの建設予定地全域に覆い被せた
灰色の粉の雨…と言つたところだらう

パズラズ「ふッ…何してくれてんだア おいトチ狂つたかよオ…あ
？」

デフラグ「つまんねえ小細工してくれちゃつてんじゃねーかよ…才
イ…クッヒヒ…」

辺りを見回すと”さつきまで見えなかつた物が”コンクリートの粉
を被り可視化できるようになつてているのだ

パズラズ「あーバレたかア俺の能力の本質がア

俺の能力は”透明手腕／ハンドイレイサー／”

簡単に言えば俺は手に触れた物を透明化させられるつて

訳さ」

パズラズの前には粉を被ったフェンスがあつた

先ほどのデフラグの攻撃はこのフェンスで防がれていたのだ

デフラグ「ははあーん、なるほどな…とりま今までの攻撃もその能力を使つた細工を施したつてわけか

何の細工も無い車の前に、”見えない車”をあらかじめ置いて発進させる…

そうすることで俺が能力を使つより早く自動車がぶち当たるつてわけか」

パズラズ「流石は第1位だア、物分かりが良いつてもんだぜ」

お前の能力は”見えない物”は軌道操作できぬようだ
しなア、今回でよオくわかつたぜエ」

デフラグ「だがひとつ分からぬ事がある…お前が車を発進させるときにつきた爆発はどういうことだ？」

お前の能力は物を透明にできるつてだけだろ？が

パズラズ「ああ、それはこれだア」

するとパズラズは右手に持つてゐる何かを見せつけた

小さい円盤のような形の物だつた

一体それがなんのかは全く分からぬが、その疑問をぶつけるよ
り先にパズラズは口を開いた

パズラズ「こいつは衝香炉ショウジョウルつていう道具らしくてなア

理論とかは忘れたが、窒素をビリビリかして衝撃波を放てるつてわけだア…」

「デフラグ「つか…そんな道具聞いたことも無えな」

パズラズ「そろそろ1位の座は明け渡した方がいいんじゃアねエのか?この俺によオ

知つてるぜ?お前…発現して間もない能力者に負けたんだろ?

お前も分かつてんじやねエのか?これから、お前より強い能力者はどんどん出てくるさ

世代交代の時が来たんだよ、古くて弱いお前がしつこく残つてたらこの高校のウイクトルナンバーも衰退しちまうんだよオ「デフラグ「てか…お前が俺に勝つたワケじやねえだろ?が…何威勢の良い言葉並べてくれてんだ?」

眉間にしわを寄せ、気に食わないという表情を見せるデフラグ

パズラズ「お前、あの日は元々女と戦つていて…勝つたと油断したところを例の炎の能力者に負かされたんだろオ?」

「デフラグ「…」

パズラズ「でもなあんか変だよなア、ベテランで第一位に立つてゐる能力者が、横入りしてきただけのルーキーに負けるか?普通

俺は…本当の理由を知つてるぜエ…お前、女を庇う炎の能力者を自分の親に見立てちまつたんじやアねエのか?」

「デフラグ「なに…!?」

パズラズ「学校にある生徒資料からお前の過去を探らせてもうつたんだよ

お前は道元に能く者ではない。向新を殺す機会を失つた。

両親はお前を能力者から庇つて死んだんだつてなア……お前はあの日その風景が思い起し、それで本気を出せなかつた、そうだろ?」

パズラズ「笑えるよなア、高校の第一位を誇つてゐる能力者様がア、情けで手を出せませんでしたア、なんてよオ」

デフラグは肩を落とし、首も下に向け、何も言わなくなつた
それを見て嘲笑うパズラズ あざわら

彼は、デフラグを精神から追い詰めようとしているのだ

テアラケは
肩を震わせ

た
だ

笑つていた

声を圧し殺していたのか
やがて耐えきれなくなり

大笑いしたのだ

デフラグ「クヒヒヒハハハハヒヒハハハハハ！」

パズラズ「なつ…」

決して正常ではない彼のリアクションに戸惑いを見せるパズラズ
デフラグ「つか、そんな学校側の用意してくれた綺麗事信じてくれる馬鹿が居るとかマジやベーよ…！」
まさかあ、俺がこうしてデカイ顔して歩いてるもんなんか
ら俺を”ホントは良い奴”だなんて思ってくれちゃったのかなあ！
？」

パズラズ「はア…？な、何言つてんだア？」

デフラグ「ああ…とりま…つまんねー小細工で俺をいらつかせてくれやがつたし
つまんねー長話で尺足んねーからよお…もう終わりでいいかあ」

パズラズ「お前…分かつてねーようだな…今、圧倒的に不利なのは
お前方なんだよオ」

デフラグ「俺の能力は一色配線～デュアルブート～時速120km、重量96.7kg 距離にして半径10m範囲内であれば指定の物質の軌道を操作可能」

パズラズ「はア？いきなりなんだア 説明したからって能力が強くなるワケじゃアねエだろオが

第一そんな子難しい事をペラペラと…単純に”そういう能力”ってだけでいいじゃアねエか

そういうのが苦痛にしかならぬエ人間だつて居るんだよ

デフラグ「それはてめえが馬鹿だからだらうがよおーー」「

デフラグが笑いと怒りの混じった形相でパズラズを睨み付けると

何故だかパズラズの周りは闇で包まれた

いや、正確に言えば漆黒、そう、視界が閉ざされたのだ

パズラズ「な…なんだア おこどりなつてんだアーー！」

何も見えず足元のドラム缶を蹴飛ばしてしまつ

無機質な「ガシャン」という音が

パズラズの不安感を煽る、冷や汗が滴り、足はすくんでいる

デフラグ「…以上は本質の応用でえ…

俺の能力は分類上”精神干渉系”つて奴でなあ
とりま…相手の脳にオーラ状のコードをぶつ刺して…”

視覚と聴力を自由に奪う能力”つて奴なんだよな

ま、こんな技使つたら楽に勝てすぎてつまんねーから
”オーラ状のコードを刺す時に現れる僅かな物理的反応
”を利用してみたらそれが結構使ってなあ？

俺はその力…”軌道操作”を”二色配線デュアルブート
”として名乗つてたわけだ

パズラズ「おつ…おいイ…んだよそりや…縛りプレイも良いとこだ
ぜ…」

すくむ足でなんとか逃げ出そうとするパズラズであったが

完全に視力が無いため走り出すこともできない

よりもよつてここは工事現場…様々な工事道具や瓦礫は目の見え
ない状況で避けて進めるほど親切な配置ではない

デフラグ「ま…」
ア…

たまたま悪い相手に当たって不意取られて殴られるなん
てもう御免だぜ…」

デフラグは周りの瓦礫を浮かせ
狙いをパズラズへ向ける

目が見えなくなれば聴力に全神経が集中する
パズラズにはその筋や鉄骨が浮かされる音が聞こえてしまった

パズラズ「お…おい[冗談だぜ]…分かったって…降参だ、降参、な…
俺の負けだつて！」

デフラグ「お前の敗北なんぞ一円の価値も無いよ…

つか降参ってのは見逃して貰ひ合言葉なんかじやねえよ
なあ…

僕をハツ裂きにしてくださいっていつでも宣言だよなあ
ああああー?」

そして激突する瓦礫の音と男の叫び声が響き渡る
彼がその後どうなったかはしらない

デフラグは用も済んだので校舎の方へと向かつて行つた

「デフラグが扉を開けると

にこやかで優しそうな笑顔で出迎える職員が1人

他は誰もおらず、扉を閉め、この部屋に2人きりとなつた

職員「やあ、よく来てくれたね、デュアルブート」

「デフラグ「よお…能力名で俺を呼ぶって事はまたヤバい話か」

職員「はは、まあここは防音設備が備わっているから、こいつ相談をするにはぴったりなんだよ

でだ、今回君にやつてほしいのは害虫駆除だ」

「デフラグ「はッ…防音されてんなら隠語なんて使う必要ないだろ」
が

職員「いやあつい癖でね…いつ誰が私を見ているか不安になることがあるのさ

とにかくで、先ほどどうやら君は一般市民まで”ワーストアウト”に堕落させたようだね」

「デフラグ「あ？ああ、さつきの雑魚か」

職員「パズラズ・バニッシュ、ハンドイレイサー

能力のレベル、操作精度はなかなかに良い人間だったのに残念だ」

「デフラグ「てか…”ワーストアウト”なんぞ」洒落た言い方してくれるなあ

「ただ廃人コース送りにしてやつたってだけだろ」
が

職員「ふふ、君は無闇に人を殺したりしない

血を流さずに入間を奈落へ突き落とす

その魅力にひかれ私達は君を迎えたのだよ」

デフラグ「…つか…さつきソイツから聞いたんだがよ

俺の親が俺を庇つて殺されたって、なんだありや書いたのお前だろ」

職員「はは、即興で書いてみたよ、でもあの設定なら君は”不良”にはなつても”悪”にはならない

それとも何か?”ただムカついたので突然的に両親を能力で殺しました”なんて真実を書くのが正解かね?」

デフラグ「てか俺はそれでも構わねえがな

そんな凶悪な奴を飼い慣らしてんて知れたら政府が黙つてねーぞ

確実に俺はブタ箱行きだ、今のじ時世、少年法なんざ存在しねーからな

お前らも困るだろ、こんな都合の良い暇なネズミ/退治業者俺以外他に居ねーぞ」

職員「ネズミ退治業者とは、君も言うようになつたな。ははは

はは、悪かった、この話は無しだ

单刀直入に言おうか、今回君に駆除してもううのは”フォアルバア・クアットロ”という男だ」

デフラグ「へえ…知らねーな

職員「彼は今ある施設に身を潜めている

だが彼はなかなか善からぬ事を企てているようなのでね

その施設に居る人間は彼も含め皆殺しにしてくれて構わない

…おひと

職員は「一斉駆除と言つてしまつたのに」という感情を抑えテフラグに事の詳細を話始めた

一方

（学校の地下部屋）

バレット「学校の地下にこんな広い部屋があるなんてなあ…」

キヨシ「最初に学校の外を走っていたのはなんだつたんでしょうがね」

バレット「それはお前が待ち合わせ場所も聞かず勝手に飛び出すからだろ！」

キヨシ「バレットさんだつて黙つて付いてきたじゃないですか！」

バレット「別に俺はここいらと関わりたくもねーんだよ…帰らつとしてたの…」

彼が「ここいら」と称して呼んだのは

TKCとタクリ、メイカだ

TKC「つたく…夫婦漫才はそこまでにしとけよなタクリ「集合場所つてのは日によつて変わるからな

こまめに連絡取らねーと駄目だつてんだよ

メイカ「き、今日は犬探しと子猫探しの仕事がありますからね…

みんなで力を合わせましょう…」

バレット「まるで冴えない探偵事務所みたいな仕事内容だな…」

TKC「ハハハ、それでもケツを込めて頑張れば報酬だってあるんだぜ？」

彼ら五人が談笑していると

TKCの携帯が鳴り出した

数秒話すとTKCの表情は険しくなった

TKC「名は…フォアルバア…クアットロ…ですか」

そして電話を切ると残り4人に向かい、言い放つた

TKC「でかい仕事だ」

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n9873z/>

アビリティー・ウェイク

2012年1月5日20時54分発行